

## 生物基礎，生物

### 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

#### 生物基礎

##### 1 前 文

「生物基礎」は、日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

##### 2 内容・範囲

今年度は、学習指導要領に定める項目である、「生物と遺伝子」、「生物の体内環境の維持」、「生物の多様性と生態系」の3分野の全てから出題され、昨年度の共通テストと同様、同じ大問の中にあって分野をまたぐような問題の出題はなかった。

内容については、探究的な要素を含む問題や、日常的な生活に関連した問題などを中心に構成され、基礎的な知識を問う問題であっても多面的な理解を求めるなど、共通テストの趣旨にのっとったものであった。また、完全な初見の問題は出題されず、教科書の知識を活用して解くような出題が多く見られた。この様な出題の方向性は、共通テストの意義という視点から、「高校の教育課程で習得した内容が如何に定着しているかを客観的に測る」ということ、受験者側の視点からは、「日常の学習にしっかり取り組んで思考力を付けて臨めば結果が得られる」ということにつながり、今後も継続していただきたい。

第1問Aは、実験の結果から対象の細胞小器官を葉緑体やミトコンドリアと推測した上で、それぞれの細胞小器官の特徴とその働きを問う問題、第1問Bは、遺伝情報、染色体、DNAの複製と転写について問う問題であった。問3は、葉緑体とミトコンドリアによる働きに伴う、ある湖での溶存酸素量の変化から湖でのpHの変動を問う設問であり、「酸性条件ではpHの値が低い」という中学校理科の知識をきちんと理解できていなかった受験者の多くは、pHの変動が逆の誤答となるグラフを選んだのではないかと考えられる。問5は、DNAの複製に関する基礎的な知識を問う問題であり、体細胞分裂におけるDNAの複製や分配について正しく理解していた受験者が正答を選ぶことができた良問であったと思われる。

第2問Aは、血液中のヘモグロビンによる酸素の運搬と供給について問う問題、第2問Bは、自律神経とホルモンによって体温の恒常性を保つ仕組みについて問う問題であった。問1(1)は、酸素解離曲線を読み取る設問であった。教科書でも扱われている内容であるが、数式を用いて全ヘモグロビンのうち組織で酸素を解離する酸素ヘモグロビンの割合を問うものであったため、正しい解答を導くことができた受験者は少なかったのではないかとと思われる。授業で取り上げる際には、単に機械的にグラフを読み取るだけでなく、事象について本質的な理解を求めるために、ある程度授業内で数的な処理を扱う必要性が考えられる。問5は、外界の温度が下がったときに熱の産生を促進する反応を選択する設問であった。しかしながら、選択肢のうち、肝臓や骨格筋での代謝による熱の産生を示したものはなく、正答とされた「心拍数の上昇」は、直接的に熱を産生する現象では

ないため、一見正答がないように見え、解答に戸惑った受験者も多かったのではないかと推測される。

第3問Aは、埋土種子の発芽実験に関する考察や二次遷移の特徴について問う問題、第3問Bは、生態系のバランスについて問う問題であった。問1は、ミズナラとシロザの発芽実験の結果に基づいて考察されることを問う問題で、与えられた情報を丁寧に読み解くことで、無理なく正答を導くことができたと考えられる。正答率も高かったと推察されることから、授業改善が進み、現象をよく理解し考察することが定着しつつあると考えられる。問3は、生態系における物質循環とエネルギーの流れについての基本的な理解を問う設問であった。物質循環については多くの受験者が正答を選択できたと思われるが、エネルギーの流れに関しては選択肢を迷いやすく、エネルギーの概念を正しく理解しているかどうかで正誤が分かれたと思われる。問4は、冒頭の会話文の内容を手掛かりにして、ヒトデとトキの生態系のバランスに与える影響の違いを考えさせる設問であった。問題の流れや題意が受験者にとって理解しやすく、トキの食性からトキが多様な環境を利用していることに気付くことのできる良問であったと思われる。

### 3 分量・程度

今年度は、大問数は3で、大問ごとにA、Bの中間が設定される形式であり、解答数は合計18であった。大問数、中間数は昨年度と同じ、小問数は昨年度より1減って15、解答数は昨年度と同じであった。ページ数は16ページ（下書き用紙ページを除く）で、昨年より1ページ増加した。受験者にとって分量としての負担感はそれほど大きくはなかったと考えられる。

設問数や各設問の文字数などは、適当な分量であったと思われる。取り扱われた題材の多くは、教科書で学習する題材が多く、目新しい題材であっても本質的には分かりやすい内容であった。個別の設問の難易度も標準的ないしは、やや平易な設問が多かった。「基礎」を付した科目は、多くの文系選択者を含む受験者が履修しており、科学の基礎的な素養を身に付けられることを目的としていることを踏まえると、受験者にとって今年度の問題は大変取り組みやすかったと思われる。

第1問Bの問4は遺伝情報に関する基本的な知識に関する設問であったが、選択肢が4択であった上にその内容も比較的平易に思われ、もう少し工夫が必要であったと考えられる。また問6は転写の過程で正しい図を選択する設問であったが、深く考えずとも選択肢の中の正答が明らかであり、問題設定にももう少し工夫が必要であったと考えられる。

第2問Aの問1は、他の問題と比べて、酸素解離曲線についての正しい知識を基にグラフを読み取ることで正解を導き出す設問であったため、やや難易度が高く、正答率は平均よりも低かったと考えられる。問2は、ヘモグロビンによる酸素の運搬についての知識の活用を問う設問であったが、選択肢の中の正答が明らかであり、選択肢の設定にももう少し工夫が必要であったと思われる。

### 4 表現・形式

全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。

形式的には、六つの中間のうち2問で探究の過程に沿った出題がなされており、実験の結果から条件を推察して探究を深めていく問題形式であった。このことは、昨年度と同様の傾向であり、今後もこの傾向が続いていくものと思われる。

一方、設問全体のうち、知識・技能を問うものが9問、思考力・判断力・表現力等を問うものが7問であった。出題形式としては思考力・判断力・表現力等を問うように見えても、実質的には比較的平易な知識・技能を問う問題が多かったように思われる。

選択肢の数は，4択が8問，5択が1問，6択が4問，7択以上が3問であり，平均は5.3であった。選択肢が4択のものがやや多いという印象を受けた。

選択肢の形式については，「間違い探し」が3問，「組合せ」が4問，「過不足なく」が1問であった。このうち，「過不足なく」は，第2問Bの間5で熱の産生を促進する反応として適当なものを選ぶものであった。今回は，いずれの設問においても，単元の内容を適切に問うことができていたと思われる。選択肢については，受験者にとって有用な思考を必要とさせる形式となるよう，引き続き十分配慮していただきたい。

第1問Aの間1，問2は，基礎的な知識を問う問題だが，実験結果やグラフを読み取らせ，どちらの細胞小器官が葉緑体かミトコンドリアかを判断させた上で解答させるといった探究的な問題設定であった。問3は，リード文との関連が薄かったものの，比較的単純なグラフから光合成と呼吸による溶存酸素量や pH の変化を推測させ，探究的な思考力や判断力を問う問題となっていて良問であったと言える。

第2問Aの間1は，酸素解離曲線の読み取りと，1分間に全身の組織が受け取ることのできる酸素の量を求める計算式の中に入る適切な項目を選択する設問であった。どのような項目を用いると計算できるのかを思考させるような探究的な問題設定であったと考えられる。

第3問Aの間1では，実験結果や表から，ミズナラやシロザの発芽の特性について選択させる探究的な問題設定であった。複数の条件や情報を基に適切な選択肢を二つ選ぶといった形式であり，設問形式から判断すると難易度の高い問題であったが，選択肢の各文章が短い言葉で端的に表現されるなど，よく練られものとなっており，落ち着いて情報を整理すれば正解に到達できた良問であったと考えられる。

第3問Bの間3は，適当な記述を二つ選択する必要がある，物質循環についての記述で正しいものを選択できても，エネルギーの流れについての記述も併せて正しく選択できた受験者は少なかったのではないかと考えられる。複数の知識を一つの設問に盛り込む場合には，部分点を設定したり，選択肢を複数選択させたりするような問題設定にしても良かったのではないと思われる。

## 5 ま と め（総括的な評価）

### ○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは，より共通テストの問題作成方針を反映したものとなっていた。特に，実験結果から合理的な推論のみを的確に考察するなど，共通テスト本試験と同様に，高等学校での基本的な知識・技能を活用し，生徒自らが主体となって学ぶ探究的な学びの重要性を色濃く示しており，今後もその傾向は続くものと考えられる。このことから，授業改善においては，教師主導の一斉授業から，生徒主体の探究的な学びへと大きく舵を切るとともに，原体験等も乏しくなっている生徒達に生物学の神秘や面白さをしっかりと納得感をもって引き出すことが強く求められていることを示唆するものであり，学校現場における早急かつ積極的な授業改善が望まれる。

### ○意見・要望・提案等

来年度への意見・提案・要望に関しては，令和6年度共通テスト本試験の「生物基礎」と同様であり，以下のとおりである。

- ・自然現象に興味を持ち，日頃の授業を大切にして学習を進めることにより，その成果が正しく反映される基本的な知識・技能を問う問題と，生物の知識を基に，与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考力・判断力・表現力等を問う問題がバランス良く出題されるようお願いしたい。
- ・思考力・判断力・表現力等を問う設問では，「生物基礎」の知識を基本とし，それを活用・探

究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。

- ・基礎を付した科目の中で、履修生の最も多い「生物基礎」は、いわば最も影響力のある科目とも言える。そのため、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、引き続き問題の難易度を調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストが、これまで過去に実施されてきた共通テストと同様、今後の受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたこと、本委員会の提案を真摯に受け止め、改善に向けてしっかりと取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように引き続き配慮をお願いしたい。

# 生 物

## 1 前 文

「生物」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

## 2 内 容・範 囲

今年度は、学習指導要領に示されている五つの分野の全てから大きな偏りなく出題されたが、大問ごとの分野の枠に囚われ過ぎることなく、分野横断的に異なる分野の見方や考え方の設問を組み合わせた問題構成が図られていた。昨年度の共通テストでは、受験者にとって既知でない題材がほとんどの大問で取り上げられ、それが難易度を全体に押し上げていたが、今年度は、教科書等で受験者が学んだり目にしたりする資料を主に用い、その資料の取り上げ方に既知でない要素を含むようにするなど、作成方針にのっとりつつも、制限時間内に解答可能な問題構成となっていた。知識・技能を問うシンプルな形式の問題は昨年度より増加したが、ほとんど全てにおいて、知識の理解の質を測ろうとする出題であり、今後もこのような出題傾向が維持されることを期待したい。

第1問は、ミトコンドリアを題材に、真核生物のタンパク質合成について知識の理解の質を問う問1から始まり、遺伝的浮動による進化の仕組みから見たミトコンドリアの選択を扱う問題であった。複数の分野を同一の大問内に含んでいるが、異なる分野で得た知識や理解を結び付けて考察できるかを判断できる良問であった。

第2問は、動物の発生で頻繁に引用される細胞の移植実験が題材であるが、実際には、モデル的な代謝経路について論理的考察力を問う問題であった。このような内容を扱った出題には、生物を学習していなくても解答可能であることや、設定を把握するまでに時間がかかり過ぎるといった批判も過去にあったが、本問ではそれらの課題がうまく解消されている。また問3は、メンデル遺伝を扱った確率計算であったが、必要な情報が整理されていて、取り組みやすい問題であった。

第3問は、植物の環境応答を扱い、植物ホルモンについて知識の理解の質を主に問う問題であった。問3、問4は、対話的また探究的な学習を想定したと思われる、実験結果の予測や適切な実験計画の立案についての出題であった。問4は、ホルモンのほたらしく仕組みを念頭に置きながら、遺伝子の発現調節においてよく例に挙げられる反応経路を題材にしていた。

第4問は、動物の反応と行動における古典的なアイコンであるミツバチのダンスが題材であった。問1では、自然選択による進化の仕組みについて知識の質を問い、問3と問4では、動物の反応と行動における、受験者にとって既知でない実験の結果を考察させており、受験者が見慣れた題材を用いることによって、受験者の解答に要する労力をうまく省くなど、よく作り込まれた良問であった。

第5問は、生態系における物質生産についての問題であったが、多くの受験者にとっては知識に乏しい海洋生態系が材料であった。問1、問2は、本質的には易しい知識・技能を問う設問であるが、題意を理解するためには、湧昇域の存在など、水圏に特有の非生物的現象に関する知識を受験者が活用できることが前提となっている。多くの教科書に見られる記述とは言え、出題の仕方にや

や慎重さを欠いているのではないかとと思われる。

第6問は、生命の起源と進化の分野における、地球の古環境と初期の光合成生物の進化の関わりを扱った問題であった。問1は、生物の代謝（光合成）の分野との簡単な融合問題でもあり、知識の理解の質を問う良問であった。問2、問3は陸上植物の進化におけるごく基礎的な知識問題であった。一方、問4は、受験者に既知でない資料を基に考察させるものの、初見でも容易に解答可能である。しかし、当該分野の学習が解答の助けとなる内容であり、適切な出題であった。

### 3 分量・程度

今年度は、大問数は6で、中間は設定しておらず、設問数は合計21、解答数は合計25であった。大問数は昨年度と同じであるが、昨年度より設問数は三つ、解答数は一つ減った。下書き用紙を除いた総ページ数は、昨年度より3ページ減って26ページであった。全体としての分量が減っただけでなく、問題ごとのリード文など、与えられた設定についての情報も明解かつ簡潔になり、多くの受験者が制限時間内に解答を終えられるよう、難易度が高過ぎると評価された過去2年の出題から適切に改善されたと言える。

程度は、全体として本試験と同程度の難易度であり、得点率もほぼ同程度と推察される。本試験と同様に難易度と得点率がおおむね望ましい範囲にあると考えられる。大問ごとに評価すると、第2問はやや難しかったと思われるが、適正な範囲内の設問であり、他の大問でも、難易の設問がバランス良く配置されており、得点率が高過ぎるあるいは低過ぎる大問はなかったと考えられる。

第1問の問3は、ホ乳類の卵形成過程において起こるミトコンドリア数の一時的減少について適応的意義を考察させる問題であり、受験者には目新しい視点を提供する良問である。一見すると、問2で正答の「遺伝的浮動」を選択した受験者は問3でも正答できるはずだが、選択肢に工夫があり、遺伝的浮動が正の適応的意義を持つ場合があることを、受験者が正確に理解しているかを判断できる設問であった。ただ、ATP合成機能の低下したミトコンドリアのみを保有した卵は正常に発生できないことに問題文中で触れるなどにより、正答率の向上を図れたのではないだろうか。

第2問の問2は、大問のリード文や図表の検討のためにページを戻らせることに配慮したのか、シンプルで短い設問であった。だが、発生についての知識と関連が乏しいせいか、題意がやや分かりにくく、内容自体の難易に関わらず解きにくい設問であった。説明の順序を考えると、物質1が宿主から移植片へ移動できるか、本来は問1で考えたはずである。それが省略できるのは、物質1が移動できてできなくても、実験1の結果は変わらないからである。問2で、実験1の結果が変わらない理由を問うなどの途中段階を踏めば、もう少し難易度を下げられたと考えられる。

第3問の問1は、教科書で扱われている植物ホルモンについて網羅的な知識を問う問題であった。全体のバランスがきちんと考慮されていれば、このように教科書的な知識をシンプルに問う問題も出題できる好例と考えられる。また第3問では、問3と問4で、実験結果の予測、それとは別の実験についての仮説に対する検証実験の立案、という探究の場面を想定した設問が、難易度のバランスにおいても適切に配置されており、優れた大問の構成であると評価できる。

第4問の問1は、自然選択による進化の仕組みについて、社会性昆虫の生態と結び付けて理解できるかを判断させる良問であり、比較的平易な設問であった。大問のリード部分も問1の問題文も明解で短く、このような難易度の問題が多く出題されることが望ましい。第4問では、問3と問4において、共に受験者には初見の実験の設定や図を用いているが、掲載ページごとに情報提供が完結するなど題意が明確で把握しやすい工夫があり、問1と同様に比較的平易な設問であった。

第5問の問2は、海洋での物質生産を取り上げ、日本沿岸、太平洋北部、太平洋赤道付近での純生産量について簡単な図を示し、三つの海域間の違いの理由を考察する問題だが、教科書レベル

の知識が背景となっており、むしろ知識の理解の質を確認する問題として評価できる。しかしながら、海洋の物質生産については、陸域との比較でおおまかに学習される場合がほとんどであると考えられるので、作問の意図よりも難易度が高くなったことが懸念される。教科書で取り上げられてはいても、その頻度が低かったり、他との独立性が高かったりする知識を扱う際には、第5問の間3で行われたように、別の図表の提供によって情報を補うなどの工夫を期待したい。

#### 4 表現・形式

全体として、教科書等でよく例に用いられる生物や図表などを題材に取り、設定や背景を理解するために時間が費やされ過ぎないような工夫があった。また、既知でない内容を用いる場合にも、受験者に分かりやすく簡潔で明解な表現が用いられていた。さらに、ほとんどの大問では、最後の設問で最初のページに戻って情報を参照する等の必要がないよう、図表などが適切に配置されていた。これらの工夫により、難易度を上げ過ぎずに良質の問題が出題されたことを評価したい。

形式的には、短めのリード文から設問へとつながるオーソドックスなつくりが全ての大問に見られた。リード部分に会話文を用いる問題はなかったが、探究の場面を想定した大問は第3問などにしっかり出題されており、探究的な問題のリード文に必ずしも会話文が必要とは思わない。また、設問数は六つの大問で、設問3問構成が3問、4問構成が3問で、全体として昨年度より設問数が減少した。設問数及び解答数が少ない大問では、考察にやや時間を要する設問が配置されており、各大問に要する解答時間がほぼ均等になったものと推察される。

一方、設問全体の解答数のうち、知識・技能を問うものが14問、思考力・判断力・表現力等を問うものが11問であり、昨年度の追・再試験に比べて知識・技能を問うものが大きく増加した。ただし、知識・技能を問うと便宜的に分類した設問にも、暗記していればそれだけで正答できるものは少なく、知識を活用し若干の考察を要する設問が多いため、単純に両者の配分を比較することは有用ではないと思われる。解答時間がかかり過ぎるような考察問題の出題をやや抑えて、思考力・判断力・表現力等も働かせるような知識問題の出題を今後も引き続きお願いしたい。

選択肢の作り方については、全体的に昨年度よりも選択肢の数が減少した。主に知識・技能を問う問題では、昨年度は5択より多かったが、今年度は4択が4題含まれていた。主に思考力・判断力・表現力等を問う問題では、昨年度の最頻は8択であったが、今年度は5択と6択が多く、8択以上は2題であった。過去2年の共通テストでは、選択肢が多過ぎることによって解答時間が削られ、それが過度な難化につながった面があった。今年度は、選択肢を精選し減らしたことに加えて、文章や語句の工夫によって簡潔かつ明瞭になったことから、受験者の負担を軽減できていたと考えられる。また、4択の選択肢の場合も、易し過ぎるものは見当たらなかった点も評価できる。

設問が減少したためか、5点が配当された設問が8問あった。このように5点問題がやや多いことが懸念される。思考力・判断力・表現力等を問う設問においては、第2問の間1のように部分点を配点することにより、受験者の学力をより高い精度で識別できる上、設問当たりの配点を実質的に減じられる利点があるため、同様の部分配点の工夫がなされる作問を今後も期待したい。

個別の問題で見ると、第1問は、リード文の下線部に受験者にとって既知でない内容を含んでいた。リード文から次の見開きページに移動した後、第1問の間3でその下線部が引用されるのだが、間3の問題文でその要旨が簡潔に再掲されているため、再度大問のリード文に戻って検討をせずに済むような優れた工夫がなされていた。

第3問の間4は、実験計画を考察する内容で本質的には平易でないものの、考察のために必要な情報が、間4の問題文中のみで足りるよう簡潔にまとめられている点が優れていた。同様の工夫は、第4問から第6問にも見られており、分かりやすい文章表現と見やすいレイアウトを評価した

い。

第6問の問4は、図2について示された選択肢の正誤を判断するために、見開きページを2ページ戻って図1を参照しなければならないいつくりになっていた。これは煩雑で考察の妨げになるため、避けるべきであったと思われる。また、問4では㉔～㉗の四つの記述から正しい記述を二つ選ぶ、6択の選択肢が用いられており、5点の配点で部分点はなかった。しかし、本問については、「過不足なく」問題として、㉔～㉗から一つしか選べなかった受験者にも部分点を配点すれば、受験者の理解度を段階的に評価できたと考えられ、今後の改善に期待したい。

## 5 ま と め（総括的な評価）

### ○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、共通テストの作問の作成意図をより反映したものとなっていた。特に、実験結果から合理的な推論のみを的確に考察するなど、高等学校での基本的な知識・技能を活用し、受験者自らが主体となって学ぶ探究的で深い学びや実験・観察等の重要性を強く示唆しているものと考えられた。このことから、教師主導の一斉授業から、生徒主体の探究的な学びへと大きく舵を切るとともに、実験・観察やフィールドワーク等、生物学の神秘さや面白さをしっかりと納得感を持って引き出すことが強く求められていることを示唆するものであり、学校現場における早急かつ積極的な授業改善が望まれる。

### ○意見・要望・提案等

来年度への意見・提案・要望に関しては、共通テスト本試験の「生物」と同様であり、以下の通りである。

- ・自然現象に興味を持ち、日頃の授業を大切に学習を進めることにより、その成果が正しく反映される基本的な知識・技能を問う問題と、「生物」の知識を基に、与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考力・判断力・表現力等を問う問題が、バランス良く出題されるようお願いしたい。更に受験者が、解答に直接つながる本質的な考察するだけの時間が担保されているかなど、個々の大問のみならず、「生物」の問題全体において、引き続き適切な出題をお願いしたい。
- ・思考力・判断力・表現力等を問う設問では、「生物」の知識・技能を基本とし、それを活用・探究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。
- ・高等学校で「物理」か「生物」かの科目選択をする場合、得点のしやすさが科目選択の大きな要因となっている現状では、「生物」履修者が年々減少していることが、生物学全体の振興に影を落とすことにつながりかねず、当委員会としても大変危機感を抱いている。「物理」「化学」「生物」「地学」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、今後も問題の難易度の平準化を是非図っていただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストは、これまでの過去に実施されてきた共通テストに比べ、より受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたこと、本委員会の提案を真摯に受け止め、改善に向けてしっかりと取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、共通テスト本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように引き続き配慮をお願いしたい。